

旋律が紡ぐと、強烈なオリジナルなイメージを醸す。初来日ときのライヴ・リヴ・ユエ・ボクは、彼の音楽を「プロレス」と表現したが、非常に肉体的で血を流している意味での演奏と歌には、ポジティブな意味でのグロテスクさを感じ取り抱つていて、そこにはまるく、彼なりの筋の通し方が透けて見えてくる。自身のHPからのダウンロードという会場でのCD販売をメインとし

ハワト・ウドレス・ウエル

3月13日 渋谷公会堂

ベレリンを拠点に活動するトム・クレールのソロ・プロジェクト、昨年7月のセカンド・アルバム「ロス」に2枚のアルバムがチャルウェイヴ・シーンで高く評価されており、今が2度目の来日となる。フロントアクトはラック・メイカーのタクミが務めていた。

ライブはクレールとサボト・モンパー一人のデュオ編成で、サボトはサン・フットでリズムを織り出し、曲によってワイオリンもプレイする。ダンスパブリックな曲ではエグイ・ラス・シエンセがうねったり、キメラの構成感はない即興性を重視している。

の季節に来日できると嬉し、「1」という店行った。「東京に来てしてショッピンで散財した。なんて他でもない話ら、父親ラヴリン・ワイオリン、ライディ、エビノド、妹マヤ、じいちゃん、ケイト、マクギラ、グランドな家族の話も出てくるが、半分は家族でやらせた感じのベラベラと話す。シリアスになり過ぎないように、これだけ彼一流のやり方だろう。

そんな中、中盤のシマ・バタクリへの想いを語りつつ、彼に捧げた楽曲「メナス・スカイライン」から「ハレルヤ」への劇的な流れでは、そんな空気に吹き飛ばす圧巻のパフォーマンスに身震いする。アルバム「マウセント」の連作発表時の告白で知られることとなった。ルーファスが生前の彼の才能に強い嫉妬を抱えていたというエピソード。

グライムス

3月27日 渋谷クラブクアトロ

会場に着くなり某人気女性タレントの姿を見かけてしまい、さっさと胸をさわつたせながら満員のフロアに駆け込む。見事な奇襲服装の若い女性がもたらす。オープンニング

たインディーズな活動スタイルも、彼が表現している音楽の確固たる自信に裏打ちされていることが伝わってくる。実際、この日のステージを体験して、サンダグの曲作りが相変わらず芽生えていることを確信したし、ソフトなサウンドも今の時代には充分オカルタネタイヴで、とてもスリリングに感じられた。自らのペリスで自信に満ちた音楽を表現している。清々しさを覚えた。安齋明定

たりと、サウンドの面白味もあるのだが、中心となるのはあくまでもクレールのヴォーカル。常時マイクを一本使い、(ニ・フエクト・ノン・エフエクト)、ファルセットを曲面に出したハイトーン・ヴォイスでひたすら歌いまくる。目を離し長身の体をまよらせながら、エーションなつぷりに歌うその姿は、まるでR&Bシンガーのようにであり、特にグ&イオリンとともに美しく、その声で歌われるパワードなものは絶品だった。いってしまえば、人気が取つてくると感じている。目を見れば、一枚の普救者だし、曲間ではさきほししや

として、サニエがミシシビ川でその命を落とす直前に実現した奇跡的な出会いで芽生えた歌で、死後、ルーファスが抱えた自己嫌悪の念、同じノード・エンとのハレルヤ、をカヴァーし続けることは彼が表現者としてのシラシラ、この世を去つた友人への後悔、両方を抱えながら過ごした15年間の情念のようなものが噴出し、実に生々しくステージ上で展開され、目釘げけつた。

彼の作品に共通して感じられる、ストイックなまでの美しさ、崇高かつとはしるような情熱、彼を支える家族、その音楽に注ぎ、音楽を構成しているすべてを、惜しげもなく、その間に凝縮させて出す。これまでで最も、人間ルーファス・ウエインイトに近づいたように思えるショーだった。 早坂菜貴

・アクトを務めるホルモニアの女性シンガー、アミ・ダグがエレクトロニクスとインド音楽的な旋律を掛け合わせた奇妙なサウンドを流し始める、近くの女性がアの手元にあ

べりまくるし、後半になると顔から滴る汗を流している。Tシャツで無造作に汗を拭いたり、なんとも風合いのいい下のニエ・ヤン風なのだ。そのキャップが魅力とも思えた。

アルバム以上にヴォーカル自体を強調していて、チャルウェイヴ云々というより、オカルタネタイヴなR&Bといった方がしっくりくるライヴだった。エクスベリメンタルを通して後にはわたりやすそうフルフルな歌ものもある、というのはロ・イ・モウの新作にも通じる現象だと思うし、サウンドのなまなまけりや歌声のものの方がクローズ・アップされてきている、とえるのかもしれない。クルー・アンコーリングのラストでは、ルルー

ルーファス・ウエイン・ライト

3月19日 渋谷公会堂

楽器はピアノとギターのみ、楽器を弾き始めるのは追いつきもいえない圧倒的な力を見せつけられるが、トピックになるジョック・溝谷で終始



写真=Shoichi Kajino

人がカカベで、しかも生声歌う歌が印象的だった。小島守

るシールドを指して「なにあのギタリー! 超かわいんだけど!」と嬉しそうな声を上げていた。さすががグライムス、彼はイデオロギー愛好者でなく、オシャリに反感を感じる子だ。このハードもしかり掴んでいるようだ。

そして、いよいよグライムス・エトラ・レ・パウチャーが登場すると、もう会場中が「わい!」の声でいっぱい。先に演奏が終わったばかり



写真=Masanori Naruse

の「アミ」がそのまざーに回るなか、2台のシンセサイザーとフェクター、サンプラーを引つ切りなして操作しながら歌うルーファス、シエンセにはトロロのぬいぐるみもそこと置かれている。それにしても、音源の印象がかなりアンビエントな雰囲気になるんだろと思っていたら、実際はパツキバキのビートが前面に出て驚かされた。シック・エンスを流しつつ、しせずリアルタイムで作りだしていく演奏もかなりスリリングだ。実際にクレアはよく機材の操作をミスっていたのだけれど、そのたびに舌を出して笑って草がまかれらしく、ついでに開帳。

おんばクレアはもうも早く、演奏中も船玉をばら撒いたりしながら、おそろし時間のステージを、思いがけず抜けていった。気が付かないアッパいな展開に終始圧倒されてしまったが、聞いたことだと昨年のサマ・ウィックではもう少し大人しいライブだったらしい。2012年に世界を

Captured Live